

(七) 高野山へ修学

高野山へ修学

四月十八日、聖衆寺の奥さんは、大法要の後かた付けも放つて、私を高野山に案内して下さいました。「入学が一週間もおくれてしまつてすまなかつたね。」と私にわびながら、私の荷物の一部の風呂敷づつみをもつて送つて下さる姿に、私はあたたかい母の心を感じました。

「いいえ。私は奥様のおかげで有難い修行をさせて頂き、本当にうれしいです。よい勉強になりました。」とお礼をいいました。

「専修学院には、高野山安養院院主、大原智乘僧正にお願いしてありますから、安心して行つたらよろしい。」

「有難いことです。でも高野山には今まで一度も行ったことがありません。どんな山ですか。」「行つたらわかりますよ。宗祖弘法大師様がお開きになつた日本一の靈山です。山は八葉の蓮の形で、頂上は広く平らか、清水が豊かに流れています。弘法大師様が未来永遠までも迷う人を救う、という大誓願で穀物や水気も絶つ全くの断食で御入定された奥之院の御廟があります。昼夜、多くの燈明がかがやき、参詣者がひきつづき、香煙はみちみちっています。参道には、千年も経たような老杉が立ちならび、その間に、日本国中の諸大名のお墓、お大師さまを慕う信者の方々のお墓が何万基もあり、この世の極楽淨土ですよ。雪の夜、奥之院の燈籠堂の前でお通夜させて頂いたことがありますが、一心にお大師さまを思い『南無大師遍照金剛』と念じていたら、お大師さまが御衣の袖でつつんで下さったごとく、ほんのりとあたたかく感じ、朝までご宝号をとなえつけました。その時、お大師さまは本当に生きておられ、私たちをお守り下さっているのを体で感じました。聖規も高野山にいる間に、一度はお通夜させてもらひなさい。」奥さんは涙をうかべながら、貧女の一燈のお照さんのことなども話して下さいました。

高野山はなんとすばらしい、有難いお山なのだらう。この世の極楽世界だ。私は、この有難いお大師さまのお山で勉強と修行をさせて頂ける宿縁を心からよろこびました。

下界は初夏。半袖で登って来た私は、まず寒さでぶるぶるとふるえました。はじめに安養院に行き、大原智乗僧正様にお礼のごあいさつをし、今後のことをお願いしました。僧正様は、にこやかに出迎えて下さり「親代わりになつてひきうけるのだから、困ったことがあれば何でも言つて来なさい。しっかり勉強して、大師の尊い密教を貪欲に吸収して自分のものにしなさい。」と励まして下さいました。私はその足で、お大師さま御入定の聖域である奥之院におまいりました。

一の橋をわたり千年杉の老木の立ち並ぶ参道の両脇には、巨大な諸大名の五輪塔や、全国の篤信者の墓石がたつています。落葉がきれいに掃除され、靈気が身にひしひしと感じられます。そうして長く待ちのぞんだ奥之院に着きました。大勢の信者さんが一生懸命にお経を読んでおられ、中には涙を流しながら拝んでいる老人の姿もありました。

私は深く三礼して、有難いご縁にお礼を申し上げました。「祖師の末資に入れて頂き、

大師の身命をなげうつて求められた無上の秘法を学ばせて頂きます。なにとぞご加護くださいませ。」と心よりお祈りしました。

物資不足のこの時代で、純綿の衣や袈裟は入手困難でありますので父が綿を栽培し、製糸して、機織、染色、仕立まで母の一貫作業で出来あがった木綿の墨染の衣と、茶色の如法衣（おけさ）をつけて、四月十九日の朝の勤行より私の修学が始りました。

お大師さまのみ教え

「お大師さまのみ教えは、この身このままで仏になること。身と口と意とを清浄にして、本来そなわっている仏の命を觀つめて、お互に拌み合い助け合って、教えるごとく修行すればよい。さとりの得難いのではなく、この法に逢う事がむつかしいのである」と門主森田龍僊大僧正の講義が始まりました。また、大師伝の講義は「大師ご誕生の奇瑞」より

始まり「お大師さまが、わずか七歳の時『多くの人を救済したい。私にその器量があれば私を助けて下さい。人を助けるに役に立たないものなら、この世に生きる甲斐がありません。この体をみ仏にささげます』と誓願を立てられ、山の上から谷底めがけて飛び降りられた。その時、天女があらわれて、稚児の大師を抱きかかえて助けられ、釈迦如来が出現して、誓願のむなしくないことを証明されたこと。その場所が、四国霊場第七十三番札所「出釈迦寺」である。大師の末徒は一度は必ずお参りして、我が菩提心を高めるがよい。」

私はこの話を聞き、感激で涙が止まりませんでした。また、大学に入学した青年大師が、その大学を中退して、「虚空藏菩薩の求聞持法」を修行するために、人跡未踏の深山に入られたこと、飢えや寒さと戦いながら必死の修行を続けられた四国霊場第二十一番太龍寺さらには高知県室戸岬の修行の時、明星が飛来してその行の大願成就を証せられた話などは、終生忘ることの出来ないものでした。この専修学院で学ぶ同志の青年僧は、誰しもこの祖師をお手本と仰ぎ、身と口と意の浄化に打ちこんでいったのです。

厳しい日々の修行と、食糧難の配給食（今の時代では想像も出来ぬほどの貧しさ）のた

めに栄養失調になり、二階の教室に上がるのにも、脂汗を流しながら手すりにすがってやつと上るといった状態でしたが、つわ物ばかりで、誰一人として逃げ出す者はいませんでした。

一期に「授戒」を受け、二期には、真言宗の一番有難い即身成仏の秘法を受けられ、百日間の「加行」に入りました。毎朝早く起きて水行で身を清めて入堂。不慣れなご真言をおとなえし、手に印契を結んで仏と一体になる観念を、まちがえぬように一心不乱でとりくんで行きました。最後は護摩行で、一応全員無魔結願した。その次は「灌頂」を受け、即身成仏の証を得たのです。